水産試験場研究評価委員会　評価のとりまとめと機関の対応方針

（中間評価）

事 業 名 （課題名）	有用貝類資源形成機構調査 （資源形成機構解明試験）	研究 期間	平成 24 年度～ （１３カ年）	予算 区分	県単

研究の取扱基準
A．計画を超えて順調（このまま研究を継続）　B．ほぼ計画通り（このまま研究を継続）
C．研究方法を修正する必要あり　D．研究を中止する必要あり

委員名	1	2	3	4	5	6		まとめ
評価結果	A	B	A	B	B	A		A

主な意見

①研究目標
・アサリ資源の回復は大きな課題であり目標設定は妥当である。
・アサリ資源急減に対する解決策は、本県浅海漁業にとって極めて重要であり、妥当である。
・極めて重要な課題となっているアサリ資源（漁獲量）の問題に対し、浮遊幼生を中心にした目標が設定されている。
・アサリの資源形成には浮遊幼生の出現が深くかかわっており、その状況を長期的に追跡することは重要である。
・アサリの資源形成に影響を与える浮遊幼生の出現状況を長期的に追跡することは、資源回復のための貴重なデータとなる。

②研究手法の妥当性
・親貝と幼生の関係から資源状況を解析しようとしており研究手法は妥当である。
・資源形成に大きく関与する浮遊幼生の出現状況を長期間把握することは基本的な必要性がある。
・長期間にわたる浮遊幼生の出現状況が取りまとめられている点は、優れている。
・浮遊幼生の把握のための十分な調査体制となっている。
・アサリの資源形成に影響を与える浮遊幼生の出現状況を長期的に把握することは、資源変動の解析に役立っている。

③計画の進捗状況
・予定どおりにデータの収集・蓄積が進んでいる。
・計画どおりデータの収集が行われ、過去との比較により解析も進んでいる。
・データの収集、蓄積はほぼ順調に進んでいる。
・計画通りにデータの収集・蓄積、解析が進んでいる。
・予定通り、アサリ浮遊幼生の出現状況が把握できている。

④研究の成果と発信
・漁業者への情報提供や論文など必要な情報発信が行われている。
・長期研究により得られた成果は漁業者へ発表する等の発信も行われている。
・修練会などを通じた漁業者への情報提供の際に、情報提供とともに意見交換も進めていただきたい。
・漁業者への情報提供や論文で成果が公表されている。
・漁業者への報告及び研究論文での成果の公表が実施できている。

⑤今後の計画の妥当性
・アサリ資源変動の解析には幼生の出現状況の把握が必要である。
・引き続き資源変動の要因把握のため調査していく必要がある。
・アサリ浮遊幼生の出現状況以外の関連要因の影響についても検討する必要がある。
・今後も継続的に調査し、浮遊幼生の出現状況を把握する必要がある。
・アサリ資源に必要な餌料環境の在り方が課題となっているが、浮遊幼生、着底稚貝についても生残と餌料環境との関係解析を進めてほしい。

⑥総合評価（研究の取扱）

・伊勢・三河湾の二枚貝資源を回復させるために、人ができる具体的対策はどのようなものがあるか、今後の研究の進展に期待したい。

・今後のアサリ資源回復に向け、引き続き研究を継続いただきたい。なお、三河湾（各調査地点等）の水環境の経年変化と浮遊幼生数の関係を示すとわかりやすかったと思う。″

・これまでに得られた成果は、アサリ資源回復策に活用されている。さらに、資源が元通りに回復するよう、データ集積と分析を継続して、成果をより高度化していくことが期待される。

・本研究は極めて必要性の高い研究で、重要な研究成果も挙げられている。しかしながら、現時点で、アサリ浮遊幼生を増やすために提示されている「長期的な取り組み」と「短期的な取り組み」の記述は、いずれもかなり一般的で、個々の研究成果との関連性が十分に説明されていない。できれば、研究成果のどの部分がどの取り組みに結びつくのかを、分かり易く示すことにも注力していただきたい。

・今後も浮遊幼生の出現状況を的確に把握すると共に、アサリ資源を回復させるための提案が行われることを期待する。

・アサリ浮遊幼生密度と漁獲量との関係が提示されており、重要な知見が得られた。アサリ資源に必要な餌料環境の在り方が課題となっているが、浮遊幼生、着底稚貝についても生残と餌料環境との関係解析を進めてほしい。また、浮遊幼生数が減少して、出現ピークが遅れていることから、今後、成貝の肥満度、成熟度との関係解析が求められる。調査を継続して、今後発生するアサリ資源の変化の原因究明の解析につなげてほしい。

機関としての対応方針

研究総合評価については計画を超えて順調との評価をいただいたことから、このまま本試験を継続する。本研究ではアサリ浮遊幼生の出現状況を長期的に把握し、アサリの資源状況との関連を検討したことで、資源回復における浮遊幼生の重要性を明らかにした。今後も出現状況を把握するべく本研究を継続するとともに、新たな知見や解析により具体的な対策につなげられるよう努めていく。また、委員のご指摘にもあるように、本事業で得られるアサリ浮遊幼生の情報を起点として、親貝の肥満度や成熟度及びそれらに影響する餌料環境との関係を解析することで、資源変化の原因究明と資源回復のための方策立案に貢献していきたい。